高音領域　PERPURE

堀田展造

目次

はしがき　近藤耕人　7
高音領域　9
解凍される牡蠣の化石Ａ　12
Ⅰ
階層１〈火の掟〉　13
階層２〈牡蠣の夢〉　17
解凍される牡蠣の化石Ｂ　19
階層３〈空気の影〉　21
Ⅱ
階層４〈呪文〉　26
階層５〈受動神経発信体による応答の動詞〉　29
Ⅲ
階層６〈転生／衝突〉　37
階層７〈夢を見る夢の目〉　41
階層８〈大死者のまなざし〉　44
Ⅳ
階層９〈白けた朝〉　50
階層１０〈半覚醒の死なない死者〉　55
階層１１《証言》　58
解凍される牡蠣の化石Ｃ　65

PURPURE　67

かく語るゆえに　69
偽装　72
雫　74
Sorge　77
紫光石の夢　80
たまねぎ　92
鯨　96
いつか見た景色　97
あいつ　100
穴の空いた紫色のまなざし PURPURE　102

振り子論　あとがきに代えて　105

はしがき

近藤耕人

男ＮＯＢＵＺＯＵは日本海を向いて生まれ、北海道の北端で育ち、銀雪の平原を見はるかし、砂浜に破船の残骸を見詰め、父親に叱られては、凍て付く石炭小屋に閉じ込められ、延々と泣き叫んだ。東京湾に注ぐ大川の畔に住み、岸辺に漂着する塵を凝視し、フイルムに撮る。やがて東京の西端の森の縁に土をもとめ、暗い夜空をわがものにし、梢の間に月の白光を透かし見る。

男は過労に倒れる。急患病棟の大部屋で獣の吼え声と死神に怯える呻き声の海に沈む。白い間仕切りカーテンに亡霊の影が映り、大地に再生する家族の大樹の幻を夢見る。

昼間、男は機械仕掛けとなって嵐の如く働き、夜間、詩人(ひと)はかつて「ガラスの犬」となって彷徨し、「犬語」を追求したが、いまは「高音領域」に詩語の空間を求める。死後の空間とも見える大雪原に置かれた卵色の脳器、馬の頭蓋骨を風は吹き抜け、高音化した喉笛を鳴らす。

ＯＵＯＵ……　目覚めを待つ卵色の母音よ
泣き叫ぶ風の空洞を震わせ　狂おしく　喜々として

雪原の猫背を渡っていく

粉雪の雪虫が風に煽られて泣き叫ぶ声は死人の声か、詩人の言葉か、幼年の訳知らぬ慟哭の蘇りか。ＯＵＯＵ……　名は転生の色、卵色の母音。詩語は「泣き叫ぶ風の空洞」、真空の高音領域を震わせる。「対象なき詩的言語」は無に通じるが、機械仕掛けから舞い上る粉雪ならぬ灰色の粉塵、液晶画面から放たれる光信号の中にも現代の表現を求める感性が、大地から汲み上げる樹液の迸りとなってひとの心に響けばよい。

高音領域

企図の書――青々と拡がる大雪原　そこに卵色の脳器を置く

〈解凍される牡蠣の化石Ａ：〉

目を瞑り　空は無響の白面　脳はなく〈生死もなく〉
剥れ落ちる碧空のかけら

空気と　高音領域の分割へ
微細な剥離の感覚　は　雲母の鼓膜へと託される

無限発熱する神経の棘　息苦しいそよぎ　は　空（くう）を翔け　金属昆虫の狂躁の領域ともいえない　長々しい直線単音　その延伸を招く無音のさらなる空洞の奥へ
余韻なく深深と鎮まる高音領域　は

I

階層1　火の掟

月　日

彼はかつて武器庫であった屋根裏部屋で目を覚ます
（窓辺の循環水時計の傍らに一枚のメモ紙）
機械仕掛けの幾千の夜
鉱物性ゆえの非情の氷花　咲き誇るいくつもの極上の冬を過ごしてきた
豪華な廃船の甲板の上　竜骨も凍りつく硬直の
予知されるべき無覚の歓喜　引き伸ばされ
身を任す柔らかな塩の風は途切れない
天空の花　硬石の悲哀　煩悶する千切れた星光
絢爛この上ない高音領域　は

罅割れていく冬空　無限の時の刻印は崩れ去る
氷温の雫音　つねに真新しく　光霧の夢に降り注ぎ

星霜のシロフオンが無明に光芒を引く
文字は消えかかる　やがて氷結する回想の軋みとともに

月　日

山火事が猛吹雪の芯を真赤に燃やしていた
（雪原への旅立ち前夜のことだった）
おのれ自身を燃やす火の舌びら
赤い口の氷狼が火の掟を飲む
「蛞蝓の自慰のダンスも詩人の虚言も拒否する　時代の旗だという正気で固め
た　怠惰なその身振りも」――だがこれだけでは全然足りない
影を持たない焔　銀箔の語　渇き炎上し漂流し
絶頂の白焔の中　平らかに現れる大雪原　無化を果した夢のように
冷熱の火粉が夢の野面を激しく放火する

月　日

猛吹雪の轟音が遍く耳に行渡ると俺は耳室を失い無音の深海へと引込まれていく。圧倒する無音の陶酔。いつからか大雪原には獣どもの足跡も煩い日付の痕跡もない。
「あの山火事は鎮火したのだろうか」

記憶の波打ち際を一足ごと注意深く辿っていった。雪原下の深い地層には〈疎かにしてはならない〉鳥どもの屍が埋まっているんだ、と伝説もいう。
焼け跡に生えた枯枝の白骨が暗闇の中で呻いていた。
幽かな遠雷――聞こえない悲鳴。細い光の糸。吹雪の吼え声は遠くでは野太い潮騒や海鳴りのまとまった音像になっているだろう。誰が聴いているか知らない。

月　日

いつか馬の頭蓋骨にも間違えられるさ。おお、宿命の無期刑だ。頬を突き刺す千年のヤマセよ。カラカラの頭蓋骨を縦横に吹き抜け、風は受動の喉笛を長々と吹き鳴らすだろう。幸いにも感覚を休ませることなく。
馬の歯が錆びない金属の切削音を吐き散らす
「高音化した自由な風の音　は？」
「砂浜に転がる馬の頭蓋骨だけが聞くだろうよ」
吹雪が新しい息を膨らませる　吐く
なにごともなく　明け方には不眠の煌く雪煙が身を捩る
覚醒の牙が齧る　夢の石を抱く漂流へ
〈大雪原へ　太陽から盗んだ白い焔の平原へ！〉

階層2　牡蠣の夢

月　日

薄目が光の帯を刷く　声を離れ文字の泡が弾じける　夢の青い水中に溶け
（牡蠣は殻の中で思考するんだ）
瑠璃色の波打ち際　砕けた洛陽が名残の潮騒を揺すっていた

やっと目が動く。俺は彼自身による伝説をおさらいする。
〈彼は平べったい石の上から海に跳びこむ　水は生温かく　一羽の鳥のほかに　天地
にはどんな生き物の気配もない　真っ黒な砂浜
一塊の岩の陰で馬の頭蓋骨に似た鯨の白い顎骨に出会う
塩に侵食された背の殻　死の友　開いた顎が恐ろしい武器である歯を見せる
鯨の吐息　熱風が彼の裸体の上を通り過ぎる　注入される葉緑素
芽を吹き出す顎　すべての歯が八重咲きの白牡丹の微笑みで歌う〉
〈参照　マンディアルグ『大理石』〉

彼は灰銀色の牡蠣だ
背の殻は死の友である馬の白骨であるとしても

繋いだ文字は夢にもこびりついていた生死伝説の詩句だった。俺が彼と呼ばれることは伝説の中ではよくあることだ。

幾重にも濡れた襞を拡げ　柔らかな海藻を食む牡蠣
〈黒い砂浜で過ごした日々の〉
水は生温かく　殻は澄んだ青い石を抱いていた

〈解凍される牡蠣の化石B：〉

白い一つの夜　一つの息の葉裏
余白はすべてを明かす　古い写真のように
だが初めから唇を震わせる語り手はいなかった
冬の朝　乾いた狂笑が卵を割る
　ぬるりと白い声が流れ出す

窓縁に引っ掛けた凍魚の顎骨
氷霜の白花を咥え
抜け殻の円い母音　は　氷原に吸い込まれるばかり
〈語に濁されない氷牙だけが漂流の悲哀を研ぎ澄ますだろう〉
訳もなく泣き叫び　痙攣し硬直し

浮き上がる神経の錘
変調の鋭い鰓声
海鳴りの低周波空振に乗り上昇し　次々加層し
悲しみの透き通った輪郭には広大すぎる碧空へ
息も止まる拒絶の氷海へ
聞こえない真空の高音領域へ

月　日

夢らしく跳ね上がりぎらつく夢の目玉が見ていた。夢の中で目覚めるまなざし。夢の中の俺が「俺の正気は真正なんだ」と呟く。変調の尖がった調べであろうと。吹雪の白い牙が盲滅法に暴れ狂おうと。何事もすべて普通のことだ。夢の中で正気でかく言うことも。回想は、牡蠣脳を何層にも分割し必死であるほど幾重にも重なり、それでも同軸の中心を外れない。地軸星に引っ張られ磁針を仕込んだ最強の目。暗い波間を漂う浮にもある重力と星へのまなざし。望もうと斥けようと。思考の翼は沈むことはない。（かく言いうる執拗な鳥の伝説風のまなざしとはいつどこで放たれたのか。氷雪の牙に紛れて星の眼が光っているとでも？）

〈月光が薄く墨を刷いていた。はじめて海を見るように、獣が黒々と横たわる海原を眺めていた。地平線も水平線も一本に繋がっている。あろうはずの雪道が景色のどこからも消えていた。〉

階層3　空気の影

月　日

晴れた日には白樺林の白い樹皮が幾重にも重なって見える。絡み合った枝枝。白　黒　黒　白。雪原の猫背が強く光った。光の粉を塗した斑な背景に、灰銀色の獣の姿が潜んでいた。光の塊みたいな美しい獣だった。氷の結晶を嵌めた目。見つめられた者は眩暈を眩暈とは知らない。目の前が真っ白になった。なぜ獣なのか。何者なのか。影のない光の背が妖しい気配を放つ。

空気の影を見たというなら白昼夢ということもありうる。だが影のない不可解な奴だ。どちらでもいい。きっとこいつに会えたことが重要なんだと思う。

銀盤の空から降り注ぎ背の毛先にはじかれまたくっつき、震え、一本の銀線に。ややこしい。思料しうる空気の影や本物の光る蒸気みたいに拡散する。獣が前触れもなく狂ったように赤い口をあけた。その時突然、消えた。そいつが丸ごと消えた。

月　日

あらゆる書物がそうであるように夢の文字にも余白がある。観念ではない、完了形に付き纏う余白のことだ。だが夢の余白がおのれの空地を見せることはない。最初の文字が置かれるべき原初の余白でさえ光が地に焼きついた完了形の影としてのみ現れる。

夢の中でも同じだ。盲者が勝手に見る夢であっても同じだ。見えるものは普通に完了形の影だけだ。そう書いた光る銀線の文字が影を隠すだろうか。見えない光そのものが充ちる黒い宙。そこに浮かんでいる広大な夢の余白。透明な輝き。おかげであらゆる出来事は抱えきれない夢の蜃気楼として現われるんだ。だが空地の像ではなく、文字による囲いの**ない**、つまり空白、では**ない**とする空白、とつねに否定予告・確定されることで、夢の余白が現れる。そしておそらく「空気の影」も。

盲者の義眼が彷徨う
手指が描くステンレス線条文字の切屑
黒い余白　虚しい輝き
黒い宙を夢見る者よ
満たされるべき完了形を求め虚しさに抗い
手ごたえもなく　夢地に冷たく染み込み
「もはや形の無い空気の影にすぎない」と書く

月　日

ともに歩む愛すべき誤読者よ
夢の余白、空気の影なる語に　秘蹟の詩語なんか見出そうとしてくれるな
君の誤読は影を熱くするロマンチックな涙を誘うが

夜の窓枠を占める大鴉の黒影のように
企図の力を振り絞り真っ黒になって張付いているんだ！
十全の企図を目指すゆえに
見えないことだけが彼の切実な在り様なんだ
そこで彼らしく与えられた空漠の
　広大すぎる余白に酔う
その狂気に震える素面の友愛こそ

＊原注　出来事と物語に対して忠実にして有効な企図のテクストを求めることは普通に真面目な義務でもある。と自覚する深度に正比例して、テクストの必然の「像」を正確に定位する第二の空間、いわば「虚の空間」＝余白が同時にくっきりと成立する。これは空想を排する論理の必然ではなかろうか。「出来事が書くことにつながり、書くことが、逆に、それらがまとうかたちはともかく、出来事としての価値をもつようになる」と、ミシェル・レリスは書くことを虚とはいえネルヴァルのいう夢＝「第二の人生」の現実的価値に結びつける。つまり、夢、想像はありがちな空想に収斂するものではなく、文字通り「第二の人生」と言いうる前提としての「第一」に繋がり二重に構築された必然のテクストなのだ。レリスは欲求のこの運動を、体験に与える「詩的色彩」への誘いと「物語の範疇に属さない純粋な詩」の構築だと説明する。（ミシェル・レリス『オランピアの頸のリボン』谷昌親訳　人文書院）　出来事と言語、詩の夢を巡るこの構想は、マラルメのいう〈対象なき〉詩的言語の働きにも通じるだろう。詩的言語の〈対象なき〉イメージ空間について強調しなければなるまい。一方で詩的色彩と純粋詩という夢の運動で貫かれる詩的言語の空間は、出来事と物語に対して忠実に**並立**する、必然の、もうひとつの自立した〈対象なき〉テクスト空間だ。そして他方、実効的な企図のために虚飾を排した現実の正確な「テクストの像」は、二重の運動として華麗な「夢の重み」で膨らんでいる。

Ⅱ

階層4　呪文

月　日

あやふやだ。薄墨の月光の雫、混じり合い、雪がひらひら舞い落ちてきた。雪は時折激しく降り乱れる。雪道が消える。斑に眠気が襲った。眠りの背後に光源の月面が取り残されているみたいだった。

白い野面が仄かに妖しく浮かび上がる。月光下、夜風になびく老いた草原。草どもの亡霊が犇めき合う。死に切れないとでも言うように。

俺はそっと目を閉じ(柄にもなく)祈りを捧げる。凍りついた死相の地層に向かって。ト書き。白濁の麻酔に懼ったように。

雪下に眠るものどもよ　獣を育んだ草どもよ　名前を呼んでやろう

忍冬(すいかづら)　繁縷(はこべ)　紫草(むらさきぐさ)　白泡草(あわだちそう)　鶏頭(けいとう)　蓬(よもぎ)　虎杖(いたどり)　蕗薹(ふきのとう)　熊笹(くまざさ)

蛇枕（へびのまくら）　月見草（つきみそう）　土筆（つくし）

枯れ草がざわめく　穂が波立ち　うずうずと頭を光らせ
踊れ　押し潰された雀の屍骸も起き上がれ

竜胆（りんどう）　芒（すすき）　犬ふぐり（いぬふぐり）　蒲公英（たんぽぽ）　紫蘇（しそ）　野苺（のいちご）　鈴蘭（すずらん）　薇（ぜんまい）　木蓮（もくれん）　浜木綿（はまゆう）
鉄砲草（てっぽうぐさ）　仏の面（ほとけのつら）　ちんちん草（ちんちんぐさ）　法華草（ほっけそう）　ナンマンダ（なんまんだ）　笑い後家（わらいごけ）　馬の糞（うまのくそ）

もういい！　虫のように押し寄せる亡者どもよ　どうせ俺が勝手に呼び出したのだ
草骸に寄生する空威張りの名詞どもめ　　俺が祈りを捧げたのは　〈草語の息　草いきれや泥訛の息継ぎ〉　草の遺骸から抜け出る名の衣装襞、語の亡霊に向ってだおお、億兆の名詞屑よ　　人類が排泄した満天の知の星屑
〈死んだ鳥の詩の崇高よ　欺瞞と毒　擬態だらけの広場　散乱する朽ち葉の祭壇〉
　　群衆と襤褸旗の周りに
天与の景色といわれようと　その尻から字形が陳腐に固まる　笑っちまう！

月　日

俺は額づく暇もなく連れ去られた。走りながら名詞どもの殻をそこらへんにぶちまけよう。獣ならぶつかることもなくどこへでもいつでも素早く行ける。感受する。記憶する。命令する。動け！　ここが現場だ！

草の名による代役は終りだ

〈解れてゆく語の綿毛　語がずれる多層弦音の膨らみ　花芯の気配〉

俺は簡潔な判決を下す

光切断線、ほら、動詞の毛先を掴まえろ！

草どもの背に光っているやつだ！

〈濾過され透き通る語のカタチ　色の匂い　気体である花！

もはや名詞ではない！　夢を擦る雲母の囁き

神経の切っ先を象る裸形の金属音〉

俺は神経の蠢くままにこの確かな動体の空間に身を任すだろう

階層5　受動神経発信体による応答の動詞

月　日

白日の夢の中を彷徨う、夢遊病者の夢こそ最も奔放で輝かしい。黒い宙。乱舞する鏡片群。粉雪の白焔が扇状に吹き上がった。俺は夢幻の鏡面と見紛う雪原にひとり取り残されていた。

光る獣が再び現われた。影のない光の塊。氷の結晶を嵌めた目。そいつが夢地を擦る変な声を上げる。

「お前を俺の氷の目玉に閉じ込め光の焔で凍らせる！」

夢なのか眩い雪原の錯視なのか。放たれる白い光。逃れる術はなくそいつの透き通った氷の目を見詰めるしかなかった。

「影のない俺を見ろ。だが見えるわけはない。お前を閉じ込めたのは影を梳く濾過器にぶち込むためだ！」

昏睡の夢の底とも知らず。獣の赤い口が太陽から盗んだ白焔を貪る。

白日の夢の中にもある広大な余白
欠落した太陽の穴
辺りは無音　鏡片　光の粉ばかり
空が裂開する**こ**の稀有な切れ目を、俺は息を潜め真剣に待っていた！

幻惑の黒い宙　最深の陶酔の底に
神経を異質の鉱水に浸す
抵抗のない余白だ　突破して掴め！
（影のない光が見えるなんて！ 晴れた日の黒い空がもたらす倒錯した幻覚だ、と伝説は面白くもない講釈をのたまうが。）

月　日

夢地が一気に銀色に輝いた　空一杯の金属雪虫が甲高く喚く
夢の空声が神経髄を摩擦する
　無限発熱し　当てのない叫喚
白銀の背中がせり上がり波打っていた

俺は夢の中で失神する　赤い口の獣が金切り声を上げた

俺たちは微かな光のそよぎにも素早く反応し自ら発光する神経光基だ。脳なんかない。自在にどこへでも透過するさ。俺たちはお前の内臓の襞を伝う小さな滴をも舐め尽くすだろう。ところがなぞったお前の滴の震えに感応し俺たちの神経は新たに帯電し作動させられるんだ。つまり俺たちは自らから先に仕掛けることでお前の中で創生される、**受動神経発信体**なんだ。
先に透過し舐めること、乳呑児の惧れを知らぬ侵犯のこの行為こそが、引受けるべき

世界に対する本当の応答、責任というものだ。精巧な共振機械による正確な等倍の往復反応だ。

ところが肝心なことだが俺たちは、舐める、すなわち直接的な行為の動詞に従い神経体として完璧に応答すること、まさにそのことだけに夢中なんだ。要するに反応の神経言語も応答の声も、真空の中の聞こえない悲鳴のように、有用のための感覚器官に達するべき媒介の空気さえもないんだ。俺たちの存在が訝しく思われるのはもっともなことだ。

滑らかだが奇怪な声の伝播だった。受動体といいつつ「先に透過し舐める」という変な言葉をなぞる声だ。聞くというより、俺は文字形の薄い金属の雪虫どもを喉いっぱいに飲み込む錯覚に落ちた。こいつらが言葉にならない神経の悲鳴を代弁し必死に応答しているんだ。率直すぎてからからだ。声を写した星形の文字にしても夢の空き地を漂うばかり。

月　日

耳穴を擽り反応の蝶羽がそよぐ
獣がこちこち身悶えして目配せする
身振りは精巧な共振機械
精気あふれる等身大の抱擁

高音の錐に自ら刺し貫かれ
あたりかまわず夢中で舐め回す
　不毛であろうと何だろうと
燃え滚る油の川に身を任せたまえ

月　日

獣が言いたかったのは、受動神経発信体なるあいつの本性のことだ。尖った牙の目。瑞々しい受光神経の先端膜。膜をなす雲母の模像。繊細な受容。緻密な記憶の光網。全組織による咀嚼と自己変成の痙攣は絶え間ない。おのれを引き裂いて受け入れ生成し即座に全身で発信する、敏捷で的確な反応行為こそ獣の本性だ。
つねに新規の変位反応である夥しい生＝死の交代。そのための獰猛な捕食と増殖の痙攣反応。というより、あいつは、ひたすらに反応することしか出来ない、そうでなければたちまちにただの死体だ。つまりあいつは生きることしか出来ない。

真紅の鳥の腹　熱い灰の中の心臓
太陽をめがけ噴き上がる金色の樹液
森の香気の中　繁茂し膨潤し
唇の孔膜が葉脈の水位を測る
粘膜縫合のための毛根を絡め

花芽の息遣い
種子の臓腑を膨らませ　引き千切り
焔の葉叢を食む　渇きに飢えた火の神経ゆえに
信憑の虹から乳を飲む人類といえども例外ではない

錐の鋭さで一直線の反応へと突き上げられ
光の泥へ？　官能に標的なんかない！

神経獣：〈様態からして神経獣だ！　元々は植物として太陽に受光反応しつつ領分を拡張する原初の神経基だ。伝説は光る苔とか光合成する神経光基について学者の記録を残す。森に繁茂する巨樹たちとも体幹を共有する。樹液が迸る神経組織網、群葉の昂じた神経センサーが放つ狂奔の蒸気や金切り声、森の精気と一体の普遍自在の体内感覚、水のように幻めいたしなやかな動き、紛れもなく神経獣だ！　影のない光る流体だ。最大の徴である自発的光源能力は、地上の生死を超えた太陽の不滅の焔を浴び受容することで形成された。

皮膚と器官全体に張り付く無数の全方位等号神経群。他者に依らない自立的な等号神経による物質交換過程の経済的分身化・領有化が果たされる。植物の胞子群のように放たれる分身が大気の世界、他者なきまっさらな世界に躍り出る。孤独と清潔の大雪原を神経獣が駆け抜ける。他者構造ゆえに強制される有限単体の宿命的擬態に縛られることはない。全宇宙に張り巡らす神経光基分身網を縦横に統御し憎悪の太陽に咆哮する神経獣！

ところで**名詞病**に罹った愚鈍な学者風伝説は、「獣は獣だ」と愚昧そのままにチョークで板書する。おそろいのスリッパのように安直な同定から始める便利な名詞の他者論が開陳される。屁理屈並みにまなざしを交換すれば片方のスリッパである自分と通行人がそれぞれ「他者」だ

というわけだ。何にも変わらない！　自分は他者だと言えば何か荘厳な物言いだが退屈な光景はそのままだ。スリッパなんか知らずどこにでも侵入する獣は花鳥風月にうつつをぬかす白けた脳みそを遠慮なく食ってしまうさ。去勢された脳みそは食われたことも知らず引用の靴を履いた名詞とねちねちと擬態交際する。愛想もない死相の名詞なら愛憎の関係にもがくこともない、賀状並みに安全無害なただの名詞の**他者**だ！　引出しにしまわれた他者。それはスリッパを履いた当人の干からびた様に他ならない。黴臭い標本を詰め込んだ引き出しだ。

他者構造が間違いなくスリッパ社会を支えている。しかしあいにくにも、あいつは安易きわまりない他者話には関わらない。神経質な皮膚感覚がそうであるようにつねに逃げやすく捉え難い**反応の動詞**そのものに託されている！　俺は酔ってなんかいない！〉

Ⅲ

階層６　転生／衝突

月　日

雪原を踏む　純白に触れる
かけらを割る清潔な音のかけら
　繰り返しとも気付かない　同一　破砕　同一
点の氷音　波打つ鼓膜そのものである雪表の軋み　跳ね返る高音直線
「僅かに多声の饒舌を溜め　遠い海鳴りに運ばれ
人類の足首の数に等しいであろう　無数の同形波頭群」

やがて鈍色の厚い冬空に吸い込まれ
　これらすべての泡立ちの交響は
　丸い音圧だけが届けられるだろう　どこへかは知らない
〈持続する発生の瞬間、切断され実体のない音こそ本物の力なんだ〉

かけらはかけらだ（伝説言語で呟いてみた　錆びた語の骸　忽ちに泡飛沫に）

水中の無音　あるいは像が崩れる緩やかな水圧の
無重力と眠りの白濁へ
水は満たされる　執拗に凡庸に
そのとき俺は、今を見失う
（俺は朝夕もない潮騒の　レース状眠りの中へ、ざらつきながら遠ざかっていった、はずだ）

月　日

死星が憚ることなく金色の花粉を海原に降り注いでいた。いつのことか。回想の花芯が疼く。毎夜の星同士の衝突。いくつもの夜空を重ねた濃紺の夢の中だった。
星は高貴な星らしくおのれの爆発と転生に賭ける。
吐き出したかけらは重力を溜めた黒い海に一直線に突き刺さる。しっかりと偶然の役目を終えた無言の父の精子のように。付随していた母星の涙も確実に海原と大気を膨らませる一滴だった。
星々の再々分割と放縦の転生。拡散し消滅し星雲に紛れ。
昏睡が拡げる夢の自由ゆえに、衝迫的な恋のようにただ一度きりの衝突だった。

（一点の火花が点じた生への亀裂。掌に刻まれた花崗岩の斑紋。背の殻が負う数多の傷跡も。すべてを引請ける宿命は避けられないんだ。運命そのものを操縦出来ないのと同じ理由で。ひたすらに大海を漂い、そして分有するかけらとしての傷ゆえに永遠に癒されないのだと俺は思う。）

太陽の炎熱が地上を焦がす。逆らえない公認の命名烙印の傷跡は消せない。使い古し　の布の擦傷に紛れる俺の署名。名から遡る一族伝来の退屈な長々しい系譜、法網と膨大な書類を繋ぐ名標の鎖、鎖、鎖。漂流者の歩みとは、太陽の炎熱と受傷によって宿命づけられた歩みにほかならない。地上への反抗と憎悪の炎、哄笑の炬火を掲げて。かけらは元々灼熱の星のかけらだ。

塩辛いあの喉声　海霧を吸った皺襞よ　衰えもなく
着古しの背を丸め　いつもの同じ姿勢で
醒めない眠りの窪みを温め
触れない　こんなに近くでチカチカ光っているというのに
毎夜まなざしの光房を満たしいるというのに
夢の花芯に星光の飴色が残っていた
（金色の血流。あの山火事の傷跡を洗おうと？
いや一切の血の源は俺のものではない！）
新生の境界も分からない
千年も億年も　目覚めることを知らず
同一　分散　同一　　死星が沈む水の夢の底で

階層7　夢を見る夢の目

月　日

光る泡の目　天空には無数の太陽群星団　純白の花火の傘　その夢を見る夢の目
葡萄の房状に増殖し　ぎらつきながらぶらさがり　不眠ゆえに自発する光源の
青白と金色光の房の目　たちまちに光の海に
明滅し打ち返し合い　光の泡　泡　なおも膨らみ続け

夢らしく妖しい虚光だ！
すべてが明々と虚しく　覚醒の芯はなく　甘く心地よい苛立ちばかり
泡の目の房状構造を眺める。爆発やまない赤白の太陽群。不眠の目がさらに冴え渡り
牡蠣脳が輝く。透き通ったリンパ液の細動波紋による脳内圧力。頭が膨らむ。俺は声
を出しそう！
（感知した圧力がなんらかの生成・分裂の合図だとすれば？）
つねに最初にして終りのない流れの中の定点合図？　分かりやすい〈生の時間流〉な
るものの脈動する標として？

月　日

夢を裏切る撞着は承知の上だ。感知の針、その回転の中心にいる限り流れなるものを感じるわけはない。俺はぴたりと中心にいながら、揺れもせず静止し、入れ替わる細密な透視像を注視する。

〈像に指示され直結する覚醒機械の目〉

凡庸で、間違いのない覚醒の像だから白昼堂々と突きつけられるんだ。電子義眼の網膜投影装置による狙い撃ちだ。脳みそは退屈な機械視覚の汎用像で一杯だ。

繁茂する組織体の数億枚の透視像全部を！

糞！　すべて機械の予定通りだ！

（予定された裏切りの像。いや、裏切りどころか完璧に期待通りだ。感動の実物細密画、巡礼の旅の観光写真、身体監視のために必須の電磁波透視像、正確無比のあらゆる記号像、これらの恩恵には心底ありがたくも胸糞悪くなるばかりだ。俺は鏡の中の俺を俺だと知っている。旧石器人の里長の髭面だって五百年後の赤ん坊のたまねぎ顔だって描くことが出来るさ。もう沢山だ！）

（おお、夢の泡で膨らんだ頭がしぼんでいくぞ。虚しげに！）

正当なる裏切りを受け入れ、あっけなく夢は終わる！

俺は昼の方眼地図の上に盲者の首として放り出される

夢を失った目覚めの暗い穴　石を齧る

だがなんとすべすべとした地上であることか

階層8　大死者のまなざし

月　日

閉め切った暗い窓　滴る水の声　水浸しは前ぶれもなく
「想像さえ出来ない、終末と流れ全体を望観しうる者とは？」
巨鳥が恐ろしげにわめく
「黒い翼はすべての夜を包む」と

窓外の虚空を氷の目にそっくり嵌め
死の鳥よ！　盲者の生乾きの網膜を覗き
最強度の断絶を密告するほどに親しげに密着し
冷然と遥かな星の威光を盗み　絶対の侵入者よ！
（要するにこの鳥の目には地上も地底もすべすべしているにちがいない）
太陽さえ一個の恒星にすぎない冷黒の宙　今や夢の微光もなく
空気のセロファンである大死者のまなざし！

夢のちぐはぐな名残をスライスする
死者の目　に瞼を施術する　閉じる

もう夢を見ることもない！

月　日

〈ちっ、世界こそ退屈な無関心そのものではないか。だから死人の仕草と見紛うこの予定調和の伝説とその開陳の行為の轍を重ね賑やかしくしてるんだ。〉

今またふわりと　高木の枝枝を純白の屍衣で飾り
静謐に　もとのままに
朝には何事もなく無音の大雪原に
気高い太古の白へ

風はそよともない
読む　書く　化石への行為　塞がれ
鳥の虚ろな目に残る　失われた夢の
　まなざしの行方を求め

「夢の終りの夢」と石に刻む

想像する無辺の地表に関しては伝説の読者にすぎない俺の**不関与無実**は疑ってさえいなかった。俺の生誕以前に俺のまなざしがあろうはずはないからだ。ところが不在を証言する今この宙吊りの文字だけが確かなまなざしである、と伝説は逆説的にいう。どんな文字にも目があると。すると読者の俺はその文字のまなざしが今そのように書いている俺のまなざしであるように思えてくる。

テクストを読むことと書くことは同じことだ。読み書くことは真に驚くべきことなんだ。「**永遠を発見する**」と書く！

雪原に転がる化石脳
上昇する〈球体の透明〉
息の塊　掌に包み
生え伸びる発情の白い指と気高い爪よ

空気層の接線へ
高音領域との分割接線へ

剥れ落ちる碧空のかけら。厚みはなく決して壊されない最高硬度の物質言語よ。虚空に放つ　獣の吠え声よ。風は空洞の頭蓋骨を吹き抜けるばかり。

Ⅳ

階層９　白けた朝

月　日

朝、一柱の雪煙が突風に煽られ泣き叫んでいた。粉雪を無駄に吹き上げ、目覚めかけた雪原を粟立たせていた。色彩のない刺々しい逆光線。他に何もない、白けた朝だった。

一斉に舞い上がる銀箔の夢の残滓
掠れていく夢のはばたき　千切れたままに
つい指で脳の中を掻き回し幻の震音に触ろうと

脳が音を発するはずはないというのに。訳もなく身悶えるほかない行き止りの無為。ふいに滲み出る悲しみの意味に怯え夢の隙間に逃げて隠れようと？　だが空っぽの脳芯が意味に怯える訳はない！

無力さは変らない。白い喪の儀式。緩やかな嗚咽。俺は呆然と厚みのない雪片の乱舞を見詰めていた。

炸裂する白面の空
無響の重々しいいつもの雪原
噴き上がり掻き毟る雪煙の　せめては銀箔の薄さに托し
好運の無為の浅瀬　朝の夢に残るだろうか

月　日

旅立ちの日と同じく吹雪が終日暴れ狂っていた。

枯れ木が倒され火を放つ。氷牙に塞がれ渇きに飢えた喉を突上げ。気安めも享楽も知らず。世界はただただ獰猛に後先もなく進行する。何万年も何億年も。

目の奥も白い渦流の闇
巨大な無関心の氷身を露わに
　冷たく現前する死の顔

〈恐ろしい饗宴は粛々と繰り広げられる。なるほどこの回想そのものが、氷結した動詞の形で雪原に残留するばかりの、つまり清潔な死の継続ならばこそ。そこは不帰の

過去なんだとあらためて証明されるとしても完璧な空漠の進行形は残る！　消えない空漠の過去、広がる白い死の闇。俺はそこにいるんだ、と。〉

群鳥の屍　固く平らかに凍結し　勤勉を貫いた擬態の羽も冷たく閉じ
白闇の奥で獣が牙を撃つ　暗く正当なる運命の苛酷を告げる　聞け！

俺は死人なのか？

未曾有の激しい雪片の渦を目の前にして、惑乱の坩堝に引きずり込まれていった。俺は獣の咆哮に飲み込まれていた。容赦なく暴かれる不在と盲目の恐怖。死人であるらしい俺と闇そのものが存在として開かれる？

月　日

烈しい嫌悪が襲った。遺骸は遺骸だと言うことと同じに愚かしい習性だ！　「死の闇」とは遺骸さえない闇の余白のことだと乾いた口で真面目に言う。

おお、語は嘘つきだ。

かくいう余白についての意識といえども安穏な完了形の有限の文字をこっそりと抱いているではないか。おかげで俺は「死の闇」なんかと無縁だとさえ言えるんだ。

「あまりの猛吹雪のせいで遠近を失っただけだ！　漂流者にありがちな倒錯だ！

きっと牙の高音に狂った無邪気な錯覚に決まっている！」

昼間読んだ伝説が必死に説こうとしていた。そうそう、俺は恐ろしい闇の存在を開く

ことなんかに興味はない！

雪原の奥でいやらしい人型の枯枝が揺れた。未練がましく哀れな類似の習性で。風が横揺れのグリッサンドで嘲笑する。絵葉書風の寂寞の風情を弄び。おなじみの擬態の鳥の詩だ！　縁切りだ！　怖くなんかない！

とはいえ俺は言葉を失ってまるごと夢ともいえない曠野に放置されたままだった。アリバイの消失点を宿す枯枝の白樺林がいつからそうなのか知らない。

階層１０　半覚醒の死なない死者

月　日

（死人であるのか、否か。）　あいまいにかく問う限り、覚めないというよりいつまでも半覚醒のままでいるのかもしれないとも思う。得体の知れない半白の感覚が漂っていた。

水中に描かれた模様のように水と一つになる。

（無数の水玉が凝集し模様が消える。繋がりが弛緩すると一面の水玉模様になる。）

俺は半ば水没者のように自制を失い不可解な何かの強引な力に引きずられ、沈んでいく俺自身を水の模様を眺めるように見ているだろう。

（あの時　確かに俺は海中に飛び込んだ）

満水の重い水中　海月に押される奇怪な浮揚の力

細い穴の中を引き伸ばされ　水圧に耐え

少年らしく星を請う恍惚がすべてだった

　嫋やかに　牡蠣の白身が蕩けていく

　上昇し胸の辺りで停止する　周縁のない気息の透明球体

（おお、これだ。あの時以来、俺にこびりついている生の実感が、これだ！）

死なない死者のように
応答のない白面の微笑み
　緩んだまま凝固し
俺は死んでいるんだと冷たく笑う

　月　日

虚言だ！　ありもしない、死生の境なんて妄言だ！　と言える証拠はいくらでもある。
夢中で、陶酔しきってきたんだ！　全神経群の轟く反応に身を任せたはずだ。だがそんなことは今はどうでもいい！

行ったり来たり　消え現われ　いる　いない
夢の端がまだ齧られているぞ！
白い肉腹を揺すり
馬の歯を打ち鳴らし
空っぽの暗い脳の襞を触る
「俺は死人だ」という語をなぞる
嘘つきめ！　止まらない狂い笑い

月　日

海鳴りが砂を噛む
無覚あるいは疲労の　忘却あるいは消尽の
　断末はあまりにも凡庸だ
定めどおりに！
日々の定めどおりにかく言う

闇の海底でも脳統制は少しも解除されていない　と言う。
ぐたぐだぐたぐだ！　きりもなく言えば言うほど、耳奥が吊り上げられるみたいに変になった。重心を失う。もはや言うべきことはない！
定めどおりにかく言う一言ごとに。かく言うごとに！

〈追補〉

階層１１　《証言》

月　日

馬の頭蓋骨をすっぽり被った自分がいた。砂浜に転がり武装の歯を剥き出し。
浜風が吹き抜ける空洞の頭蓋骨
白化する化石脳
（夢から覚めても頭頂に残る）誰も覗き得ない夢の穴　そこに
不意の証言が鋭く内耳を突付いた。声は晴朗で一段と高貴な響きだった。素面の伝説作者なら「無音の雪原に正気の蒸気が自ずと輝いているだけだ」と言うだろう。おお、上等だ！

俺たちは張り叫ぶ猛吹雪の高音に叩きつけられ氷の海に飛び込んだ。降り頻る雪が次々に水に溶けるように、水の中で融合の涙を流さずにはおられなかった。涙の分身どもを普遍の太洋に溶かし、受け入れ、つねに大洋の一分子であるよう永遠の備えをしたのだ。融合し溶け去る者たちの涙。その無尽の涙のおかげで俺たちは再生し不死普遍の氷獣となった。俺たちは無の氷原を大地として駆け巡る。
〈不死普遍の氷獣〉、生死のない俺たちはお前を無へ誘う。ぽっかり開いた沈黙の深

淵、そこにあらゆる感覚が吸い込まれるだろう。予知されるべき無覚の歓喜、猛吹雪の恐怖を越える死ののっぺらぼう。生死を越えた明白な余白感、無だけがある。感知されるべきものは何もない。余白を漂う万物の不在という回避不能な現存があるだけだと言おう。透明な現存。この形のない空気の影が語りの完了形として付き纏う。空気の影つまりいかなる実体もなくただ偏在するばかりの「影の完了形」、語の亡霊だ。それは有限のお前には預かり知らぬ最上級の普遍の存在なのだ。不羈の清潔な神経のみが触知しうる元々影をなしえない足元の大雪原や大洋と同等だ。

吹雪が白い肺腑を膨らませ泣き叫ぶ。亡霊がお前の前で息を吐く。だがあまりにも淡い雪片同士の摩擦は感知されない。空気から濾過され聞こえない悲鳴。孤独な透明の声は沈黙の深淵から発せられ、遥かな高みに宙吊りされた無音の爆発域、高音領域へと託される。　そこにお前の耳がついて来られるかどうかは知らない。

澄んだ声は微妙に複数態だった。聞く声と発する声。ひとつの波長に重なり、俺と言おうがお前と呼ぼうが、どちらかが飲み込んだらしい一筋の金色の金切り声。喉奥で無味のたんなる金属片がしなっているみたいな声だった。内臓の襞をぬめぬめと舐められるように感じて思わず身震いした。

他人らしく素直に聞こう！　（空気の影、すなわち亡霊として彷徨う影の完了形が最上級の普遍の存在だ）、とは形のない虚しい宣言にすぎない。だが初めから自失の解消不能の悲しみに満ちた、この上なく潔い高貴な言い方ではないか！　海中に飛び込

み、水に溶け名を失うことはあいつの誇りでもあるんだ！　証言は、普遍の孤独の運命を告白してやまない。

［とはいえ、真剣な証言に素直に反応しすすんで運命を甘受する感覚のなかに、俺は有限の伝説と共犯するしらけた感覚を覚える。〈死なない幽霊、みたいな齟齬である不死の神経獣〉とはあいつの伝説として出来すぎたひとつの明らかな完了形だからだ。と、納得すればするほど晴朗な響きは透明の無意味に近い。抜けられない**昏睡の様相**そのものではないか。］

（夢の中を歩く）

夜毎金色の目で俺を見張ってきた
太陽の憎悪を受け継ぐ目玉ゆえに
俺は誰からも生まれたのではない！
高く泣き叫ぶその声は吹雪の慟哭とひとつになったお前の吼え声
お前だと気づかない共犯の誤読者が四辻に立つ
当たり前に空気の影を見過ごして
（昏睡の極みは覚めないまま不眠でいると平気で不条理を言うことだ。不眠は苛立ち荒れ狂う獣が眠りの奥で喚いているからだ！）

夢の透明の中を歩く／突き出した舌に雪片が小さく降り積もる
入り乱れる高音銀線　おお、記譜は多すぎて追いつけない
（夢中になって歩き続けているんだ！）
夢も雪原も、舞い落ちる雪虫の千の目にすっぽりと囲まれ。
回想はもはや誰がそう言っているのかわからなくなった

［覚束ないゆえに静寂を聴く研ぎ澄まされた感覚の誘惑に駆られ闇や無覚についての牢固とした伝説を易々と信じてしまった、それだけのことではないのか。**俺は熱心な伝説信者だ**。そうでなければ死の闇なる形容を知るわけがなかった。やがて訪れる無覚の静寂などという馬鹿げた言い方も。だが伝説に関わりなく、あまりの静けさのために大雪原が気づかれることもなく不動の余白として当たり前に横たわっている。元々そうだった。］

月　日

幻の雪虫群は消えた
青々とした空が残る
（これだけは文字に記そう）
ＯＵＯＵ…　目覚めを待つ卵色の母音よ
泣き叫ぶ風の空洞を震わせ　狂おしく　喜々として
　雪原の猫背を渡っていく

頭が二つに割れきんきんと高音が満ちるとガラス文字のパズルチップもばらけ、俺はもう一度はじめから一つに集めようと必死になる。
きっとうまくいく。すべてうまくいく。
（しなやかに歩むために。雪道を見守る死星の伝説。伝説を紡ぐ企図こそ真っ当だ。夢想の指揮者の見えない指先が踊る。明るい雪原の向うを、向うに引き寄せられ、すっきりと指差すように。）

〈了〉

〈解凍される牡蠣の化石C：〉　机上に残されたメモ

トタン屋根を撃つ　みどりの雨音　雨樋を走る水滴
彼はかつて武器庫であった屋根裏部屋で目を覚ます
〈機械仕掛けの幾千の夜〉　液晶画面の埃とウイルスの糞　夥しい漂流物　不眠の引
出しに詰め　休むことなく歩き続け
　回想の濾過器が深い息を吐く
　傍らの机上には止まらない循環水時計
　滴る雫　雫　雫
　充満＝空白　空白＝充満
　彼は空気との幸福な等号を守る

極上の冬を過ごしてきた／おお、豪華な廃船の甲板の上だ／竜骨も凍りつく硬直の
予知されるべき無覚の歓喜／引き伸ばされ／掠れがちに喉笛を震わせ　風の高音は…
…

PURPURE

かく語るゆえに

（そこに）手足をもがれた昆虫、動物たちの死骸の骨格。静かにそれらの消滅の物語を見守る。いつか折り畳まれ焼け焦げた繊維質の主語　も。気づかぬうちに、もう川下の方へか、水に溶けて流れ去ったのかもしれない。一切の情念のうめきも聞こえない

見覚えのある首が枯枝にぶら下がっていた
怯える暗い川面――漣　途切れない漣　白い牙を隠し
太陽は白く凍りついたままだ
　死人らしい氷の舌先がまさぐる
　繊維質の慣れ親しんだ皮膚　野火の焔が氷肌を撫でる

（紫光に染まる　浅い眠り　穴だらけの野面）
かく語る間も　まさにかく語るゆえに　（おお　口調の窒息と衝突こそ火花の生を押し出す！）
焔から踊り出る千本の

青磁の指先を見詰める
鉄骨の継ぎ手を伸ばす
白紫色の火粉を握る掌よ
ついに金属化する朽葉の唇よ　乾いた舌びらを絡ませ
かく語る語の骸をしゃぶっているだけではないか

苛つきながら流体の動詞が近づく
怖じける　願う
〔予感と構造幾何学の鉄鋲を撃つ。正しい文法による鉄路敷設図と思考の鉄床。無傷の掌を信ずるべきだ。古い正気の砂利道を踏む。困難な塔の設計図を読み解く。冷静のボタン穴で留められた継ぎ手は非情よりも常赤であろう、と先に思う。〕

昂ぶる透明な音圧は誰が感受するというのか
初冬の澄んだ水面を驚かせ
季節外れの黒い蝶羽が群れる
無数の枯枝の首が笑いさざめく
川底の青石に一筋の傷跡を残し

今度こそ純潔の朝霧の雫たちよ
分散し　一分子へ　回帰し凝固し・・・

偽装

浜辺にピアノが捨てられていた。七色の夕陽のベクトルが分解される。金色と緑色の孔雀の群れ。洛陽に偽装した大鷲が鳥の赤色の心臓辺りをフォークで突き刺した。ピアノは本当は二台のはずだと絶息寸前の鳥が呻き声を漏らす。役にも立たない暴露された謎。鳥が見誤ったのは灼熱の太陽が焦がしたピアノの青黒い影のせいだ。だとしても訝かしいことは何もない。鳥の金赤色の心臓と濃紺色に変色したピアノ。弾ける連弾。没落する太陽を追いかけ鳥どもは喪の儀式を真似て七色の扇羽を捧げる。

鳥は火に炙られ煙になる。新月の細い唇が闇の宴会を告げる。星空が雲に隠れると空に残った煙は波のカクテルグラスに注がれるはずだ。偽装とフォークを受け入れた褒美に。見違えたお気に入りの影も打ち寄せる波が跡形もなく飲み込んでしまった。壊れたピアノの足だけが波を憎んで立ち尽くしていた。「波は時間である」、と辞書にある。余計なお世話だ！ 夜明けには金色と緑色の鳥どもの遊戯は再開されるだろう。偽装の大鷲が舞い戻る。陽光を引き連れ、圧倒的な大気のように。

スケッチだ。思考しえない大気のことを言うなんて。舌先から伸びた筆のせいだ。太

陽も鳥も筆の習性にすぎないではないかと習性の舌がいう。偽装はどこまで及ぶのか。

［ベートーヴェン『二台ノピアノのためのドッペルコンチェルト』第六番ハ短調第一楽章　作品番号なし

『偽装』　この楽曲が見つかれば偽装は完成する。］

雫

亀裂も枯渇もない水の滑らかな様態に安堵する　としても　俺は　雲が抱える不安の
雫にすぎない　雨季に特有の重い雫をぶら下げ　〈何か〉〈何を〉
　落下への誘惑　水膨れの脳器を抱え
〈巨大な雨雲から生まれたんだ　森も冠水し　同素である水の唇が激流に喘ぐ
薄青く光る異化の羽　夜通し溜めた思考の雫　脳に落ちる〉

俺たちは水滴に囲まれている。否、かくいう俺たち自身が水滴だ。苦渋。重い水。落下への重力を溜め込んだ湖底のように。一足ごとに俺たちは重くなる。すべての原因は明らかだ。水滴についてたえず語るこの口だ。
〈私〉　流体であればこそ同定は俺たちに課せられたどうしようもない身振りではないのか。綿毛の繊維質からさらりとした粘液質の流れへ。その逆も。流れ去る水滴。

朝焼けの空にけだるさの穴を穿ち
カタピラが噛んだアスファルト敷地にも
土中に根付く繊毛の先端にも　夜陰に息づく葉脈を光らせ

ガラスカッターの刃先から雫走り
雫　音もない運命よ
雫のまま純化した雫の中心に
　気化への刃を研ぎ
執拗な重力と螺旋の陣痛に耐え

〈何か〉への　もっと強力な磁力を放ち　不安を返すように真っ直ぐに逆噴せよ！
濃霧の中　決断の羽化
　おかげで俺はやっと立つことが出来た
（雨中に溢れる光胞子　森に降り注ぐ星空の鉱石群　金属文字を撒布する）
　動くために　歩くために

白雨に濡れる広場に　石化した黒い根瘤が一つ
精巧な蜘蛛の首骨ごとそっくり手に取る
蜘蛛は遠い密林に隠した銀糸の巣を想う
黒曜石の夜空　鉱油の海
雫　ソプラノの水晶声帯を震わせ
夜明けの水色と薔薇色が夜光虫の幼虫を膨らませる
人里離れた沼湖に　ミドリモが青々繁殖していた

Sorge

朝、ポンプが草原の水をくみ上げていた。水の平明な流れに身を任せるべきだ。今夕の弔いは一族の正気にまかせよう。幼子がぼろぼろの下腹の襞を掻く。理由のない悲しみに喉を引き攣らせ。
ポンプが忙しく朝の蛹を吐く。
水しぶきを揚げ律動が草原全体の水源を掻き乱す。

〈生まれ立ての痙攣する蛹は　悲しい〉と掌に文字を**書く**。
読むとは文字が薄緑色の羽化に震える様を見ることだ。
永遠の朝が蛹に偽死を贈る。生／死　文字の素早い交互の脱皮。
　安堵と鮮烈な痙攣を終わらせないために。
そして**書く**とは偽死を暴く手による**読む**行為のことではないのか　と思う。

皿が次々にレストランの食卓に運ばれる
飽食と多すぎる弔い客　揃いの喪服と黒い歯並びの群衆の列
　幼子のポンプを顧みることなく

引用は臆病と嫉妬の緑眼のせいだ。つまりその程度のものだ。すべての儀式と引用は人間的なのだ。食卓を飾るには場違いであろう去勢のための教本が警告する。引用を侮辱すると礼節の紅茶が冷めますよ。召し上がれ。明日こそ、俺はライオンを仕留めてやる。

真っ白な光の樹液　大気のように密集し
降り注ぎ　熱帯の雨滴が巨樹に大地からの引用を忘れさせる
蛹を乗せる葉　雫の呟き　密林に紛れ　ポンプの気息が擬態語で囁く
〈湿地と濃霧を構成するSorgeという名辞について考えたまえ〉と
見知らぬお前　お前　流れ落ちる雫

雫音の発声者は二人だ　断ち切られているゆえに
生まれ立ての鼓音の呼応　入れ替わり　輻輳し
やがてひとまとまりの驟雨へ
　増幅し厚い雨煙を被り
　一つの雨期の気圧帯を呼吸する
夏の重さに耐え切れない翼が海原に沈む
お前　泡立つ漣に紛れ
　雫　一滴

紫光石の夢

＊

橙色の背光は朝日なのか夕陽なのか。不明の薄光を溜め白布カーテンが窓を覆っていた。スクリーンの用をなす白布には男が何者かの役で映じられる、と男は夢で見る劇場体験で確認する。つまり夢の中で男はスクリーン劇場の役者でもあり観客でもある。溶暗しつつある部屋の片隅に置かれた姿鏡に、垂れ下がったカーテンと髑髏みたいな白い花壺が映っていた。

男は部屋を出入りするだけの単調な蛸壺暮らしだ。見かけはそうだが劇場では迫真の苛烈な人生物語が演じられる。とはいえ台本に従う予定された演技や観劇で血を流すわけはない。その上一応外と部屋を隔てるカーテン装置は休息や娯楽の効果のように元々身を守る意味があった。もはやわが身の一部と化したスクリーンに囲まれ網膜は劇場の欠かせない装置だ。男は部屋がなければ居場所がないと知るから部屋と劇場の掟である人生物語の台本を空気のように受け入れる。かくして観劇も演技も安寧無為に夢のスクリーンの中で遂行され、結局何もしていないに等しい日々が守られる。安全凡々の蛸壺暮らしは見かけ通りに本当のことだ。

＊

劇中に嵌った男は疎かに出来ない台詞のやり取りや下準備のために激しく身をすり減らす。膨大な台詞群は劇場の歴史全体に匹敵する。歴史そのものが書かれた台詞群にほかならない。ともかく台詞を正しく使用し応答出来なければ役者・観者として失格だ。習得のための苦役や厳しい劇場の掟は元々劇場の台本に書かれただけのことであるはずなのに、劇場漬けの男は責苦にも傷心にも甘んじる。胃は脳みそより敏感で夢の中で無覚の傷を受けることもある。幸いにも胃薬は胃に直効する。劇場には万能の備えがある。何の不足もないむ夢劇場に没頭する蛸壺暮らしが際限なく昂じる。暮らしはどんよりと薄暗い部屋の中で、いよいよ何もかもがどっぷりと韜晦な蛸壺そのものになる。精進の果てに疲労の眠りに漬かり日課であるかのように蛸壺の夢の中に男が消えていく。

出口のない陶酔の蛸壺暮らし。部屋の中では白々とカーテンが花壺と戯れている。

＊

交わらない弧線　着地しない夢の黒地
血流の多層弦音を浮立たせ
血みどろの中に唾を吐く
吐いた息に安堵する
咳は止まない
鳥は眠っている
こちこちと電灯スイッチ
カーテンに映える明かりの下

ねばねばと血の海を掻き分け
煙の先に俺は書く
朝の水汲みポンプの鳴声　水と鉄が目覚める
息は白く　抱いた未読の詩集のように

＊

胃薬が効いて苦役の夢も珍しくすっきりと忘れたある日の夕暮れか朝方か。ぼんやりと暗い窓越しに突如稲妻が閃いた。一瞬際立った白光のカーテンを透かし白い亡霊が現れたと見えた。予期せぬ至近の閃光に目が眩んだのか。

男が見たのは、亡霊が白刃をかざす容赦ない斬首の光景だった。白布と一体になった稲妻の刃が花壷の首を斬る。刑執行のドラマにしては奇妙な様子だった。斬り落とされる寸前の首は苦しむどころかうっとりと愉悦に浸っている。白い花弁の首が笑う。花首にもある脳が襞を拡げ蠢いているようにも見える。男はいつもの幻視癖もあって閃光の夢に浮かぶ脳の外姿を眺めているように覚える。覚醒の眼といっても男は蛸壺の中ですっきりしたにすぎない。

＊

罪名は自動車運転の『前方不注意・酩酊運転罪』みたいな『無関心・不認識罪』だ、と訳のわからない宣告が台本に書かれている。やはりドラマだ。唐突な宣告の下書きといい、カーテンの亡霊が執行者というのもいかにも荒唐無稽なドラマらしい。それでも部屋には自分しかいないのだから身に覚えはなくても男は自分が裁かれているのかと思う。演者のくせにいつも受身だ。半信半疑だが首は見ている蛸壺男の首だと思

う。そう思うのは劇場の常として見者は演者だからだ。

＊

あんなに詰込んだ台詞頭が無関心・不認識、空っぽ頭だとされそのために処刑されるとは！　冤罪だ！　冗談のドラマの中の断罪かもしれない。だが判決についての説明は几帳面な劇場らしくいつも同定の定義で終わる。世間法廷において最強の原理は戸籍原本のように厳かな同定だからだ。すべては蛸壺の秩序と安全のためだ。冤罪でも冗談のドラマでもない。ならば不可解でも真剣な処刑でなぜ笑うのか。生来のめでたさから首役は満足の笑みを浮かべているのか。空っぽは笑うしかないということか。空っぽ頭にはわからない。笑える空っぽ頭だとしても、生涯、真面目な蛸壺男として観客あるいは舞台役者然と振舞い通したんだ。台本通りの、称賛に値する円満至極の往生だ！　喝采は見事な空っぽ芸人に向けられるべきだ。

＊

空っぽなんかのはずはない。迫真の能弁と技で真面目に役をこなしてきた。頭は役回りの地位を固めるための台詞集で一杯なんだ。立派な職業人らしく完璧な職業台詞で武装した暴走車こそ理想ではないか。蛸壺だろうが暮らしの全肯定にほかならない日々の勤めのどこが悪いか。台詞頭がお墨付きの引用と決まり文句のカスで一杯になり発酵しカビ臭かろうと知ったことか。政治でも芸能でも講壇でも引用が多いほどハクがつき巧くいく。一言一句、役者人生のすべてが引用だといっても過言ではない。観客としても役者のお馴染みの引用口上はすべて理解出来る！　最上の出来だ。

＊

それにしても曖昧な罪名でその上いるはずのない亡霊による処刑だ。ますます不可解だ。少しは醒めた男の目に分かりやすい、もしかして台本にない雷光ゆえのいわば場外ドラマの一場であったのか。力づくでも首を場外に逃れさせようと？　だから脱出の成功に笑みを漏らしたのか。だがそもそも男が劇場を捨てるはずはない。事実、男は亡霊による斬首刑に仰天しつつ首役として健気に共演する。よくある茶番の一場として自虐めいた無用劇に加わったのか。なるほどカーテンが花壺の首を斬るという茶番の無用劇の様だ。それでも蛸壺男の空っぽ頭は花壺に落ちともかく居場所を言い渡される。無用劇であろうと有用の定義から逸れる空っぽはないからだ。けっして場外を許さぬ定義された有用の世界が劇場だ。つまり空っぽ頭でも居場所を占める立派な有用とされるわけだ。この二重の残酷さが暴かれることはない。ましてやすすんで台本に従った落首処刑が悲しく残酷だなどと感じるわけはない。白日の相を晒す雷光が、劇場の仕組みの一切とともに蛸壺暮しの茶番と斬首の真意を一瞬閃かせた？　何のことか？

＊

男は礼節正しい劇場世人だ。世渡りに必須の誰彼についての誠心の気遣いと消息通を自認する。たとえば訃報で誰彼を思い出す程度に。そして如才ない劇場世人らしくお互い様に半端に誰彼と言い合うほどに親しい。礼節は深入りを禁じるからだ。程よい親密さを保つために『礼節としての偽友情』などという不名誉な本当の告発は聞かないふりをする。礼節の了解のもとに演じられる世人の常道ドラマ。どこが悪いか。当たり障りのない気遣いの消息知と礼節が空気のようにゆきわたり、信号に従う通行人

のように無駄に衝突もせず劇場世人が能面で行き交う。

消息知は『無関心・不認識罪』を免じる通行手形だとでも？　誰彼を思い出す程度の消息知でも？ だが精緻、詳細な伝記であろうと、伝聞と引用にほかならないそれらがどんな新たな知をもたらすといえるのか。誰彼の足跡を拾い集めたからといって付け加わるものは何もない。何がしかの消息知を嘗め回す独善の下水溝。そこにひとは無知蒙昧の案山子のように佇立し千年変らぬ盲目の目くばせで微笑む。お互い様に無知蒙昧ゆえに無知蒙昧を気づくことも気づかれることもない。完全犯罪として不認識無関心罪の謎は隠される。というより元々空気然としたこの罪は定義により宣告されても暴かれることはない。一応ドラマとして宣告はなされるが、この罪による被害者がいるのかどうかさえも問われない。与えられた台本を誰も一切疑わない。疑われるような台本は台本ではないからだ。

＊

消息通などいないのかもしれない。正直、誰彼のことなんかどうでもいい。自分への甘い言及がなければ誰彼の訃報も知ったことか。男には訃報をないがしろにするほどに**素の読解力**が本質的に欠けている。蛸壺男は消息通にもなれない。益々赤裸々な『無関心・不認識罪』の烙印が増えようと、蛸壺ゆえに男には届かない。それどころか相変わらず盲目の暴走で手一杯なんだ。糞であろうと同類の誰彼並のおのれに関する言及の証文や勲章類のプラスチックを溜めこんだ栄光の糞蛸壺。処刑済の哀れな髑髏が生涯の舞台の床下で悪臭を放っている。礼節と有用の臭気空間、その普遍的な完成だ。香気のように劇場空間を繋ぐ美しいSorge（気遣い）よ！　劇場の群衆に向

け、粗相のない引用で飾りうけ狙いのフレーズで演説する。当たり前のことだ。輝かしい社交証明である肩書き名刺束、心地よい疎遠を確認しあう挨拶賀状束を押戴き冠婚葬祭の礼服にきちんと身を包んだ劇場世人に咎められる落ち度があろうはずはない。礼服の下は立派に人類仕様の骸骨だ。

＊

不認識罪とは的外れの応答を撒き散らすいわば確信犯による暴走罪とも言い換えられる。だとしても台本どおりの運転に誤りはなく暴走については何も知らない。つまり的外れも暴走もすべては台本どおりに進行する。劇場では掟を外れることは起きてはいないし暴走についての裁定もつねに掟の限界内に収まる。結局、不認識は劇場の仕組みそのものなのだ。どんなに暴走の度がすぎようと人類劇場の存立が揺らぐことはない。すべてが日常の舞台だ。どこかいるはずの台本作者や罪の宣告者があえて問われることはけっしてない。なぜなら劇場人にとってはこの問そのものがありえないからだ。そうでなければ劇場全体のぶち壊しだ。確信的な不認識は台本通りに齟齬のない正当な状態なのだ。空っぽ頭が正しくも同形の蛸壺に収まる。数十億個の盲目の蛸壺が劇場の繁栄と正当性を担保する！

つまり、暴走、蛸壺、劇場、すべてが不可視の現実なのだ。

不認識無関心は白夢のガス体のように計り知れなく巨大化する。

誰彼不明の抜け殻に等しい亡霊が姿鏡の中に立ち竦んでいた。時に激甚の素の摩擦光光が閃き、紫光石の夢を割る。夢劇場の廃墟を露わにする。呆けた白牡丹の首が花壷に沈み靠れていた。首のない男の演技は完璧だった。謎の微笑が幻視ならば本当のと

ころは演技の外で明かされるはずだ。だが男は鏡を見ているだけだ。

＊

「聞いているのか？」

かい暖炉の前に集う友。耳は厚く塞がれていた。声は届かない。人間の台詞を捨てたと嘯いたあの時。曖昧に希望を抱く。続行する落下

歩いても歩いても

水銀光の長い街路

夜の透明の水槽に沈む足首　何本も　何千本も

　揺れ　縮れ　だぶり

路上はどこへも辿り着けない

＊

蝶番が忠実に首を回す　時を捻るように

昔日と変らぬ開閉

回転の最中に当の蝶番を凝視める

この息苦しい忠実さを疑いもせず　俺は嘗てのカーテンの部屋を訪れた

扉を押す　というより蝶番が招く　鉄骨と漆喰で固めたドーム天井　暴かれない独房に膝を屈し　生きたままの骨体標本　積年の台本読みに疲れた灰褐色の脳器が転がっていた

　引用の壷に養われた皺だらけの老いた首がしわぶく

「もう夕暮れだ」

ものいいたげなカーテンを揺らし　汚れたステンドグラス窓の色光を追い
おお、扉の向こうは夏の日の朝焼けではなかったか
　星は消えている

黒黴に食い荒らされた少年のまっさらな漆喰壁よ　そこに
罅割れた古い鏡　腐魚の白目が虚ろに泳ぐ
口調は鮫肌の台詞癖　鏡像が歪むと見紛うほどに
いつかの亡霊が骸衣のカーテンに包まれて吊るされていた

幸いなるかな！　廃墟同然の過去よ
受話器は不通のままだ
それならば摩滅を免れた蝶番の沈黙こそ
孤高と隠遁の鑑ではないか！　無口あるいは星との連帯と言えば泥酔あるいは無能の
格好がつく

たまねぎ

「見慣れた風景に違いないのに、切り取られた一瞬のその空間へは永遠に到達しえない」という感想ほど、くらくらするというか退屈なものはないわね。
たしかに、つぼにはまった形式だからね。でもな、そう納得したところで見えるものは後から後から続くんだぞ。群衆は尽きない。この鏡像言語も。剥ぎ取っても無駄だ。

たまねぎが狂う
真空が重層する　薄く透ける球皮　重さゆえの爆破の兆し
青空の水位が上がる　いっそのこと頭が真空になっちまえ！
たまねぎが瑞々しく身を解く
純水に浸る思考の葉脈房　蒼白の膨らんだ根皮が水を求める
頭はたまねぎで一杯なんだ。たまらずに、怜悧な蜘蛛を飲み込む。こいつらは、飛んで行ってもすぐに戻って来る。こいつらの目に、地上人間の大事な靴である、お利口にもお揃いの「調和信憑」、その安全の意義がすっかりと見えるだろうか。永遠にたまねぎを剥いてやる！

鯨

明け方　脊柱に流れ落ちる水音
台詞は忘れたというぎこちない確信
名残の水紋の破声が地下水道に響いていた

深夜から翌昼まで１４時間一睡もせず過ごして夕方から今度は１６時間爆睡した　空
高く飛ぶ鯨の群れが煌く水柱を噴き上げる夢を見た　海中であったかもしれない
海藻の掌が頬をぬめりと撫でる
半睡の耳に遠くから電話の声　お前は誰かと問う
お前こそ誰かと言い返す　俺は鯨ではないが掌の主でもないと言おうとして止めた
俺が見たのは悠々と漂うその状態であったからだ
海藻の胞子が一番近いのかもしれない　泡に包まれた不眠と昏睡　揺れながら俺は３
０時間溶けていたはずだ　消えたのか　違う　会話がその証言だ
何を証言したというのか　誰に？　誰かと問うただけだ
撫でられたのは間違いなく夢の中だった

電車の向こう側の席で辛そうに咳こむ男がいたが誰も見ていなかった

胞子だらけの夢の空洞
半睡から覚めた身ひとつの鯨が泳ぎ出す
太陽黒点を巡る濃い影の円をいくつも描き
悠然と深い空を回遊し
しんなりと背鰭をのけぞらし
太陽が金色の穴を空ける
群泳する鯨が一斉に熱湯の潮を吹く

おまえみじめで下司な街よ
黄昏の裳裾　高層ビル壁をぬめぬめと濡らし
血を求むと見まごう赤い窓列のうねり
地下水道を吹き抜け　目覚めの冷気に飢え
眠らぬ夜の銀蝋を齧る

真昼は止まったままだ　もうじき蒼穹の暗黒に沈んでいくだろう
筋雲を飲む鯨の群れ　幻覚なんかではない

いつか見た景色

水槽の青い魚は昏昏と眠り続ける
ピアノの足元で不眠の白い花弁が色づいて背を仰け反らす
魚は泡とともに重さのない母音の浮袋によって浮く
　穴の空いた泡　泡　泡
　水紋を揺らす黒色の母音列
水槽を訪れた郵便配達人が俺の名前について証言する
主観の水槽においても俺の名前がお前だと　証拠をふりかざして
おかげで魚語の水紋は連中には解読不能だ
鰓に挟まった細い骨をしゃぶる　骨は魚語の文法だ
背びれに判決のナイフを入れる
「壊せるものなら壊してみろ」

電話の中に僅かな星と白けた月が残っていた
額には青とオレンジ色の海洋が広がっていたはずだ
沖合いの漣を弱々しく光らせ　それでも銀波のトレモロを送っていたはずだ

遠洋船の赤腹に弾ける泡波音　届かぬ呟き　血の色を隠し
行き場のない魚語の卵たち
不随の黒鍵が踊る　狂った子音のアルペジオ
〈ＯＵＯＵ〉〈海洋で眠るためにはこれらの母音で十分だ〉

月光の無色が照らす　時効の不在配達証明書
海辺の古い家には手縫いのカーテンが吊るされていた
　経年の白布の塩辛さに俺は泣いた
俺は部屋を飛び出し爆薬を仕掛ける
橋の上から着たきりの灰色の上着を抛り捨てた
しわくちゃの水紋の下に俺の名前が沈んでいた　解読不能のままに

あいつ

芯を知る者なら、書くという無駄な行為の違和感の根拠がそこにあると知るはずだ、
と夢の中で俺はあいつに言おうとしたのだが　あいつは例によって宙吊りのまなざし
を動かすわけでもなく相変わらず辞書の言葉を機関銃のように連射していた
　まるで届けられないというよりも届かないことがあいつの存在を近づけているのだ
と納得した　亡霊らしく見開いた眼は虚しい同意を表すようでもあった

俺はせめて影踏みの追いかけっこに夢中になる
極上の粉雪を纏うあいつ　触れ合わない淡雪の冷たい肌　触知と予感は夢の中でも不
可能だと嘯く　あいつと多言する　暗い姿鏡の中で　手指を踊らせ巧妙に顔を隠して
も　部屋を温めた証拠である連弾の楽譜が残されていた

影踏みの日記を閉じる　あいつの声も足跡も消した
黒革表紙に納めた淡雪の白さよ
散乱する夢　黄金の陽炎よ　ああ無駄だ
あいつが呟いた違和感だという熱芯

押し迫る狂喚　未踏峰の絶壁を割る雪崩
すべて　あいつのせいだ！

穴の空いた紫色のまなざし　PURPURE

白しらと声は聞こえるが名指されるものはない
　白く錆びた声
　連弾は終わりだ
行き場を失い粟立つ水流は見えない
明日スライスされるであろう
　新月の鋭い歯
消えかかる水音が細い鋼線を弾く
穴の空いた夜
溢れる水の夜
窓いっぱいに紫水晶の空が水没する
PURPURE

振り子論　あとがきに代えて

振り子論を書こうと思う　（星光に濡れる崖下　眼がガラス粉に塗れる束の間に）
落ち着け　願い通りの空気と心臓の振り子論だ　空気のように煙草を吸い続けてきたんだ
もう一度心に思う　黎明の懸崖を穿つ水脈を測深せよ
肺腑が夜気の清々しさに透き通る
賑わいの日々あるいは成り行きも　星座が放つ電飾の祝祭さえ
　進展と補償の振り子　〈俺は月の満ち欠けから目を離せないのだが〉
　死守せよ！　月影と寸分違わない影ふみ
　崖下に緑地を拓くんだ　井戸と黒い樹々の緑地を
回帰する支点　支点よ　侵されざるものよ
決断の水を送り続ける心臓　鎮座する明晰判明の王冠よ　生真面目すぎる道化師の教科書に従ったまでではないか
決心が握り締める繻子の投網　星図にはない隕石の積み上げ図

緑地の風景

〈革椅子と白磁の便器に跨る象　武装の象皮に描く
千台のトラクターによる山腹の方眼地図〉

ペンを咥えた肛門の貌よ　吼えろ
椋鳥の一団が弓なりの楕円を描いていた
急いで書くこと　鳥どもが夕空を汚す前に
黄昏の束の間の平衡　非想　のビル壁が沈む
閉じられる水門　満水の夜　掌を開く
おお　今だ！　心臓ポンプの轟き　空気振り子論を書きなおすこと　何度でも

五十年後の煙草の煙よ
　咽ても！
少し歪んだ虚ろな貌よ　暗闇で欠伸する見飽きた肖像写真のように
不沈の振り子機械ならばこそ　よくやった！
決死の潮境　沸き起こる海図どおりのシンフォニー
とうとう象の耳飾に触れたぞ！　見事だ！
クタバレ　コトバの盆栽屋
夜更けの深鉢に生える不動の足　せめてもの花器に活けた肋骨が悶える

〈振り子の構造〉

心臓に命令し振り子は大気を生産する
強かな鳩の息を漏らし
ヒフハポハホ　ホハポハフヒ
構造はそれだけだ

早朝の鉄橋が撓っていた　重力とゼンマイの戻り力こそ
轟音の運行表　錬鉄の昼　光線の雄叫び
ともかくも三角形の安定と崖下の静寂を信じたまえ
まるで人生の杖だ　磨り減った石突
しらけすぎた狂気の泡は不味い　へたくそな歌手が明け方の時報を告げていた
額入りの蝋の顔　煙草の匂が染み付いた革椅子　休みなく揺られてきたんだ
足元の海の深さが夜気の中にあった
確実の振り子が戻る　緑地が静かに寝入っている

（２０１４年１月４日　西葛西にて）

１４年夏、俺たち家族三人は、４０年間写真館を営んだ西葛西を離れ、何の縁もない八王子に居を移した。望んだ引越しというわけではなかった。難航きわめたビル売却、当てのない住家と店舗探し、トラック１４台分の大荷物の荷造りと三か月越しの大引越し作業……、七十歳を越えた俺たち夫婦にとって過大すぎる大仕事が待ち受けていた。らちのあかない銀行や業者との交渉、縺れた近隣との話し合い、見知らぬ町

での新しい店の立ち上げ、すべて手作りの店と家の改装工事その他諸々、神経と身体を磨り減らす難題が山積していた。崖っぷちであった。俺たち三人はほぼ毎日記した作業課題の検討日誌である『転機日誌』を囲み話し合い仕事をした。『転機日誌』と命名したのは、引越しの選択を、４０年間の暮らしをさらに太く変える転機として積極的に乗り越えまさに「望んだ」選択にしたかったからだ。妻も息子も必死でがんばった。終生の恩師である近藤耕人先生、永年の友である永井・前川両君の優しい気遣いは一生忘れられない。天上の星となった母の涙声、喜久子義姉の無言の援助のことも。２年たち、俺たちはほとんどの課題をやり遂げた。俺は肝臓をやられ一ヶ月間の強制入院と一年半のリハビリを余儀なくした。

『高音領域』『PURPURE』の大半は、この大転換期の最中である２０１１年ごろから２０１５年末に書かれた。このあとがきの下書きは入院中の病床に持ち込んだノートパソコンでしたためた。

「私を助けてください、助けてください」、不憫にも気がふれた老女が延々と哀願の繰言を喚き散らす。強制入院の夜、救急患者病棟の大部屋は異様そのものだった。あちこちから発せられる重症患者たちの絶え間ない呻き声、獣と化した咆え声、駆けつける看護師たちの慌しい足音、懐中電灯が揺れ仕切りのカーテンが静まることはない。「毎晩修羅場ですよ」と夜回りの看護師が言う。人が人でなくなる断末魔の恐怖の坩堝に放り込まれたみたいだった。

当時の下書きにはこのように書かれている。医師からは俺は「放っておけば一週間で死にます」と告げられていた。だがいきなり救急病棟に押し込まれた俺は事態をよく飲み込めなかったのか、能天気なイメージにうつつを抜かしていたようだ。

常夜灯の明かりを透かし薄明に似たカーテンの白に思わず目を凝らした。脈絡も

なくしかし待っていたようにひとつの鮮明なイメージが浮かんだ。俺と妻と息子の三人が手をつないでも余りある巨樹の幹を抱えている。しっとりとした木肌の感触を感じた。幹に耳を当て巨体の内部を駆け上がる鋭い滝音のような水音に歓声をあげた。若々しいが絶句するほどの古木の体内の水の色は金色の蜂蜜色だと想像した。出来すぎていてありふれたイメージだと思った。いつか思い浮かべてみたいと能天気に願っていたのだろうかとも思った。そうであっても素直にこれは一種の「天啓」だと思うことにした。絶命の悪夢と獣声に充ちた深夜の病室に天使のように訪れた緑樹の生気と光溢れる瑞々しいイメージの夢だ。薄明の枕元で心が濾過される思いであった。「天啓」ならば、何年も何十年も嵐の季節であった俺たち家族に向けて届けられたありがたい僥倖の徴にちがいない。

緑樹の夢が伝えたのは、「大地」に根ざす強さを持ち且つ想像的で瑞々しい感覚の優位だ。この新鮮な感覚がどんな場合にも**自立的に**生動するという現実的で親和的な思考が欲しかった。寝静まった夜更け、引っ越した新しい家の庭土に降り立った。冬の晴れた夜空に都心では見られなかった澄んだ星光が散らばる。暮に植えた梅木の細い枝に硬い芽が夜目にも膨らんでいると判る。大地とは地面の落ち着きに親和する全体感、その現実感のことであるにちがいない。この緑地から夢で出会った感覚とイメージの詩語が始まってくれるだろうか。

大作業に没頭し出来事一つ一つを機械組み立てのように整列させ処理する実感があった。『高音領域』には「機械仕掛けの幾千の夜」という語句を記した。機械仕掛けの行動の日々と緑地の詩の夢、出来事と詩語を巡る構想は、前作『ガラスの犬』においては形象ならざる形象、「犬語」として追求した。『高音領域』においては、同

じ問題意識で「空気層から分割される高音領域」に詩語の空間を求めた。

「空気層から分割される高音領域」とは、対比的な通常言語である「伝説」が担う大気のような常套句の日常、根深い歴史物語の追手に対する積極的な忌避、絶縁の境界、裁断された真空の領域だ。

むしろ現実がこの領域への道を強いた。「転機」においていやというほど味わった現実がそうだ。現実は神経にとっては台本を破り捨てるように渾身の力で忌避すべきものだった。そうでなければ神経は凍りつき狂ってしまう。いつでも露骨に他人事である礼節にかなう美辞麗句の氷唇地獄、「甘えるんじゃない！」、身内から（でさえ）残酷とも気づかず滑らかに声高に吐かれる心底腹立しいクソ人生訓・通俗運命の常套句、それらの氷針に晒される恐怖があった。まるごと欺瞞劇場からの逃走の衝動があった。しかし逃げるわけにはいかない。

完璧な企図と実行、機械仕掛けの澄んだ見通しのもと、ひとは無為の碧空を獲得するだろう。充溢と無為とは逆方向にある同一の状態のことだからだ。詩の夢が始まる。現実が求める努力を代理夢想する怠惰な天使の夢ではない。肝心なことは、確かな詩的言語空間を掴むことだ。マラルメは〈対象なき〉詩的言語の働きと言う。詩的言語とは、通常言語の指示する現実に還元されることはなく対象として転用の対価を汲む関係を持たない、自立した軌跡を辿るものだと理解しよう。詩の夢は機械組み立ての日々と並存する無為の碧空と大地の上においてのみ繰り広げられるはずだ。

夢を引き攣らせる神経の絶叫。現実の氷唇地獄、救急病棟を揺るがす苦悶と絶望の絶叫？　全然違う。取り乱し歪んだ精神の様ではない。現実の修復は、共振自動機械の作動と、この日々を支えるべき神経の冷静で豊かな対流の中でこそ可能だからだ。だとしても水流の分子間のように絶え間ない応答・対話の泡立ち、その絶対の希求は、

詩の夢の中では密やかな言語ともいえない喉奥のひくつき、神経の痙攣の無音の表出にすぎない。聞こえない叫びだ。〈孤独と沈黙が湛える硬い悲哀の調べ、あるいは同じことだが、詩の夢においてのみ輝く全開の反応、恍惚の金切り声。それは空気を媒体としない聞こえない高音領域の震音だ。現実の喜怒哀楽にも軋轢にも全く起因しない、高音が閃く乾いたテクスト空間だけが焔で清められた生の健康的な空間であるだろう。詩は夢空間における切実な神経の震えだ。〉

聞こえない高音言語は現実の他者構造の錯綜を無用化し透明化する。しかしそのことによって、常套句の地獄に対峙する冷静な機械仕掛けの現実の活動が不要になるわけではない。なぜなら自由な神経が紡ぐ高音言語と地上のブルトーザーの規則は同時に時間の歯車を回しているからだ。危機的な転機ならばこそ二重の歯車を回す嵐の中の行動は詩人の甘い夢想ではない、唯一とるべき現実の行動だ。大雪原の極北、空漠の詩的空間、孤島さながらの「孤独と空虚が直立する他者なき世界」（ドゥルーズ）が現れる。

紛れもなく二作は「嵐の日々」に書かれた。毎夜のように何年も書き続けた。「夜には、わたしは街路を駆け抜け、わたしは絶叫した。昼間は、わたしは静かに仕事をした。」とブランショは言う。病床に持込んだ『白日の狂気』の一節だ。夜、詩行の街路を眼をぎらつかせ駆け抜ける、拘束された病床に呼び寄せた衝動がそれであったはずだ。昼には見えない透明な狂気、夜の街路は清々しいゆえに抵抗のない真空空間を吸い寄せるように詩が生起すると理解しよう。冷徹に仕事をし、「詩の頭」がしっかりすれば、〈思考＝空気と行為＝心臓〉の振り子は、せわしくも支点を外れることなく、健全な無の確認に従事するだろう。緑樹の夢の歓声はその先にある。この声を

引き寄せるためにブランショに頼った。

普通に劇場世人としてというよりまさに自ら望んで嵌った「歴史劇」の蛸壺の穴について、いつか詳らかにしなければならない。時代の危機と弱者敗者に本質的に寄生する偽天使・悪魔の教条が詰まった蛸壺、蛸壺の「正義・思想」に適う現実の捏造と洗脳による暴力的同質化、恥ずべき知的剥奪の穴、穴だらけの自分を埋めたい。自分が掘った穴だ。穴のすべてを上回る代償、根こそぎの代償を自分の責任で「転機」に求めなければならない。何度も言いたい。人類には想像を越える圧倒的な形而上学が背後にあろうと、悪魔が教典通りに描くでっちあげの「現実像」ではない、素の神経による具体的で精確な応答、生き生きとしたその現実感覚だけが欲しい。

『高音領域』『PURPURE』においてめざしたのは硬石の現実感覚、水に溶けない鉱物性錠剤、孤独な夢想の詩語だ。それらは平らかさにおいて「失敗」もなく「人生」さえもない、まさに機械仕掛けによる無償の代償だ。荒海に浮遊する不沈の、たんなるブイだ。上等だ。

（２０１８年４月１０日　八王子にて）

こうおんりょういき　パーピュア
高音領域　PURPURE
発行日　２０１８年１１月１５日
著者　堀田展造（ほったのぶぞう）
発行所　七月堂